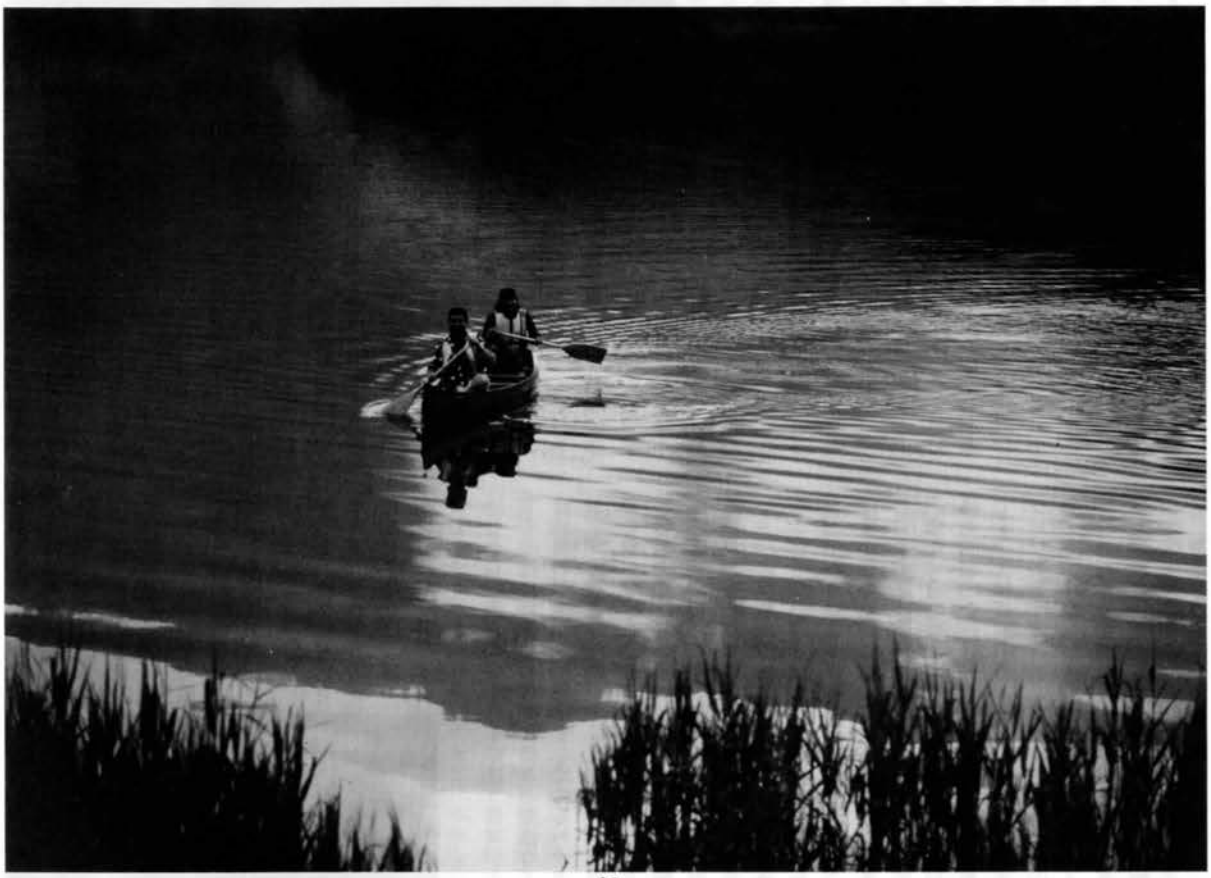
山と博物館

第40巻 第8号 1995年8月25日 大町山岳博物館



湖(うみ)からのメッセージ（青木湖） 撮影 西沢 要

〝村時間〟

扇田 孝之

〝村時間〟という言葉がいつのまにかなくなり、村の寄り合いが時間通りに始まるようになっていた。

そのことに気づいたら、

若者は村を去り、父さんは勤めに、母さんはパートに出て、孫を保育園に取られてしまった婆(ばば)は、一人テレビの前でうたた寝。

家々の縁先のガラス戸には白いレースのカーテンが引かれ、真昼の村に人の声はない。

週末、ようやく村がざわめく。

でも、田んぼや畑には、さまざまな機械のエンジン音が響きわたり、軽トラが、わがもの顔で畔を行き来するだけ。

村人は決められた時間に支配された。

ついこの間まで、

大人は、一日のほとんどを、田んぼや畑や山で過ごし、子供たちはカラスの鳴き声を合図に家路についた。

村人の生活は自然の時間とともにあった。

〝村時間〟は、自然がきざむ時間と社会が決めた時間の間で、自然と人工、非合理と合理、個人と社会、そして、何よりも、

僕たち自身の体と心とのバランスを図ろうとする人間の知恵であったのか――。

（地域社会研究家）

北アルプス八方尾根の植物

石原敏行

白馬村北西部に位置する八方尾根一帯は、昭和三十九年八月に、八方尾根高山植物帯として、県の天然記念物に指定され、動植物の分類等学術的にも貴重な場所です。

当尾根下方部では、ゴンドラやリフトが通年運転されており、一気に標高一七〇〇メートル地点の黒菱平まで我々を運んでくれます。そこから二一二六メートルの八方池までは遊歩道的な自然研究路が設けられていて、地質・気候・地形等の様々な変化・形態を背景に育つ八方尾根の植物の姿を眼のあたりに観察できます。後で述べますが、八方尾根では幾つかの要因で、他山とは違った珍しい植生を見ることができます。

手軽に自然に親しめるというのは、ともすると人々は軽んじてしまったり、大事にする心を失ってしまうことにも通じる恐れがあり、自然を愛する者にとっては、悲しい事や怒りを伴う結果を見なければならない場面が多々起こってくるものです。そこでグリーンパトロールというものが必要となってくるのですが、本当は私など好きな花の事を、訪れた人達に聞いてもらい、見てもらうだけのグリーンパトロールであったら、どんなによいのか……。

天上の池　八方池

花を根付で持って行く人や、ゴミを散らかして帰ろうとするグループをとがめたりしない日があれば、とつくづく思うことです。

さて、周知のとおり、標高が百メートル上れば、気温は〇・六度下がります。たとえば、八方池は標高二〇六〇メートルですから、ふもとの白馬村の標高七五〇メートルと比べ、およそ九・三度の気温差となるわけです。当然その気温の違いを一つの原因として、植物の植生も変わってくるわけです。山の標高差による植物の植生分布を垂直分布帯、つまり山地帯とか、亜高山帯、高山帯などと呼んで分類していますが、ちなみにこの亜高山帯、高山帯の定義に関しては、研究者の間でいまだに、というより今でもヨーロッパの分類に従って、日本には高山帯はない（ハイマツの生育条件などから見て）亜高山帯にすべきである。という論議もあるそうで一〇〇パーセント確たる定義はないようです。

しかし、素人の私が思うには、言葉があってその後に自然界の事実が伴うのではなく、自然界の事実が先に厳然としてあるわけですから、言葉とか定義の中に自然界の事実や現象をすべて押し込めるのは所詮無理なことで、この論議には終わりはこないのではないかと思います。ましてや日本には、日本固有の自然界があるわけですから、日本と裏側のヨーロッパの自然の定義に日本の自然を押し込めることもないのではないか、などと山道を歩きながらうつらうつら思うのですが、ここでは昔からの定義に従っておさらいいたしますと、まず低い所からブナ林の発達するまでの一帯を、山地帯と呼んでいます。標高としては一四〇〇ないし一六〇〇メートル辺りまでです。次が亜高山帯。植生からいうとオオシラビソ帯と呼ばれていますが、これが一四〇〇メートルから二五〇〇ないし二六〇〇メートルあたりまでです。そして、その上が高山帯とされているわけです。この高山帯の始まるあたりから、背の高い針葉樹が途絶え、ハイマツが見られます。その名のとおりハイマツ帯と呼ばれます。もう一度下にもどって、山地帯の下はカシなどの生育する山麓帯また

ハッポウウサギギク
八方尾根特産種。通常ウサギギクの茎は一本だが枝分かれしている。筆者が発見し、本年五月長野県植物研究会誌を通して発表した。

ハッポウワレモコウ
八方尾根特産種。カライトソウとワレモコウとの雑種。

は照葉樹林帯と呼ばれ、およそ六〇〇メートルあたりまでです。その上が前述のブナ帯で、山地帯と呼ばれる所です。亜高山帯はオオシラビソ帯とも言われる様に、オオシラビソやコメツガなどの針葉樹林帯であります。ですから亜高山帯から高山帯に移行するあたりを森林限界と呼ぶようです。呼ぶようですと申しましたのは、北アルプスの山々のなかでも北端の山、つまり唐松岳から不帰の嶮、天狗岳、白馬三山、小蓮華岳などの辺りは我がテリトリーとして数えきれない程登っているのですが、ここら一帯は極端に降雪や残雪が多いため、雪による圧迫が強く、針葉樹林の発達が悪く、確たる森林限界を見ることができません。白馬岳などでは、亜高山帯での針葉樹林の発達が見られず、ほとんどがダケカンバやミヤマハンノキなどの低木帯になっています。また、高山帯のハイマツにしても同様です。ハイマツの生育が悪いので、亜高山帯と高山帯の分かれ目は、景観からはよく分かりません。しかしこの森林限界がはっきりとしない代わりに、強風にさらされるいわゆる風衝地とか雪田などに特有の植物群落が発達して、美しい花々の宝庫となっているわけです。さて、山の一番高い一帯を高山帯と呼ぶので、そこに生育する植物を当然の事ながら高山植物と呼ぶわけです。もちろん自然界の植物の事ですから、高山植物と呼ばれながらも、山地帯や亜高山帯に降りてきて育っていたり、その逆の場合も当然あります。当然といいながらもたとえば、高山帯の三〇〇〇メートルあたりのほとんど栄養素のない岩壁や岩礫地に咲くシロウマリンドウなどを、たまたま白馬岳の足元である猿倉で見つけたりすると、うーん、と思わずうなってしまう事もあります。猿倉は土壌も豊かで、標高もたかが一二〇〇メートル強の所です。こういうものに出会ったりすると、自然界の妙とか自然界の不思議に出会ったりした様な特別な気分になるのですが、植物の種にとっては、自分が空中を舞って風などに運ばれ、行き着いた場所がそこであったわけで、栄養が良過ぎるとか、標高が低過ぎるとか不満を言ってはいられません。ましてや人間に妙だの不思議だのと、勝手に思わせる為に咲いている訳でもありません。不満な土地柄でもなんとか生き延びて、次の世代を作り出さねばなりませんからそれなりに必死です。植物の側からいえば、妙でも不思議でもなくそれが全く自然の活動姿なのだろうなあ、と重ねて思わされたりします。

八方尾根上部のお花畑

一説によりますと、我が国には五七四種の高山植物があるそうです。そのほとんどが氷河時代に北半球の北方から南下してきたもので、氷河時代が終わりを告げるのに伴い、序々に生き延びられる場所として寒冷地を求め、高山の土地に根をおろし落ち着いた、というわけです。

さて、話しは八方尾根にもどりますが、ここは唐松岳の東方向に広がる高原状の尾根で、黒菱平から八方池まで夏ともなると尾根散策に多くの人々が訪れます。ここは標高一三〇〇メートルから二一〇〇メートル付近までが蛇紋岩、それより上部は花崗岩でおおわれている特異な地質の所です。蛇紋岩は非常にもろく、超塩基性で酸化マグネシウムの含有率が高く植物の生育には適さないものですが、八方尾根の植生の珍しさはここにあります。蛇紋岩やこの岩が崩れて土となって尾根全体をおおっている点にあるのです。まずハイマツですが先にも述べたとおり、森林限界となる針葉樹林がとぎれる標高二五〇〇メートル前後より上部の高山帯に生育する植物です。ところが八方尾根では、このハイマツが一三〇〇メートル付近から現れます。本来なら重いザックをかついで三時間～四時間もかけて苦しい思いをして登り、頂上が見えてくると足下に、ああ、やれやれハイマツだ、となるところを、ゴンドラで上がればいとも簡単にハイマツが現れてくれるのです。ここでは高山性の植物が一四〇〇メートル付近から二一〇〇メートルあたりまで見られ、それより上部で亜高山性の植物が見られます。これを植生の逆転現象と呼んでいます。これもやはり蛇紋岩の存在が一因といわれています。蛇紋岩の超塩基性の土壌は、酸性で栄養分に乏しく、その上そこに含まれる金属イオンが植物の根に有害なため、一般的には植物が育ちにくいのですが、その土を好んで生育する植物も少なくありません。人間に変わり者と呼ばれる人がいるのと同じで、植物にも変わり者がいる様です。

蛇紋岩の土質の影響を受けて葉が細くなったり、茎や葉が赤紫色になっている植物や、八方尾根でしか見ることのできない珍しい花もたくさんあり、植物の宝庫といっても過言ではありません。

もちろん自然界はすべてが私たちにとって、色々な意味で貴重なものではありますが、白馬村の八方尾根が私達にたくさんの興味深い事を眼のあたりに見せてくれる貴重な場所である事を、あらためて見直していただければたいへんうれしく思います。

（財団法人　八方振興会職員）

ハッポウツガザクラ
八方尾根特産種。ツガザクラに比べ花の開口部が狭く、ガクが緑色。これも筆者が発見した。

大町市のオオトリノフンダマシ

宮田　渡

大町市東海ノ口のブドウ園においてコガネグモ科のオオトリノフンダマシを観察した。このクモの安曇地方における分布を見ると、南安曇では普通種だが、北安曇では小谷村と松川村に記録があるだけで稀種に属する。

記録

和名　オオトリノフンダマシ
学名　*Cyrtarachne inaequalis* Thorell
観察日　一九九四年九月十六日　昼間
観察地　大町市平海ノ口一二九一八
西沢毅夫氏経営のブドウ園

写真1　オオトノリフンダマシの雌（矢印部）と卵のう

観察したのは体長一センチメートルの雌と卵のうである。当日気温摂氏二五度。卵のうは上下二段、合計四個が糸につり下げられていた（写真1）。卵のうは茶褐色の紡錘形で柄の部分までいれると長さ三・五センチメートル、子グモはすでに脱出しており付近の葉上に散っていた。卵のうのすべてをハサミで切り開いてみたところ、一つの卵のう内に子グモの死骸が二個体認められた。

雌は卵のう付近のブドウの葉裏に静止しており（写真1の矢印部）、刺激を与えると脚を引っ込めるが、しばらくするともとどおりになる（写真2）。体形は丸みのある三角形で腹部は黄色味を帯び、他は黄褐色である。大形の目玉模様がこちらをにらんでいるようにみえる。トリノフンダマシの名は、脚を引っ込めたときの姿が葉上に落とされた鳥の糞を思わせるところから付いた。このクモの属名のキルタラクネはふくれたクモの意であるという。キルタラクネ属のクモは同心円状の水平円網を張る（普通のコガネグモ科はラセン状の網を張る）。夕方から活動を開始して作った網は明け方にはたたんでしまうので、この網を昼間みることはできない。

写真2　オオトリノフンダマシの母グモ

最後に、この観察にご協力いただいた大町市教育委員会の皆さんに感謝申し上げる。

参考文献

新海明（一九八九）トリノフンダマシの夜、クモの話Ⅱ　九〇―九六　技報堂出版
宮田渡（一九八八）クモ形動物、松川村誌――（一九九三）クモ類、小谷村誌

（大町山岳博物館嘱託員）

博物館だより

資料寄贈ありがとうございました

登山装備・写真等　目黒区鷹番　酒井　松次

アイゼン　1点　大町市大町　本島　護

登山許可証他　2点　名古屋市瑞穂区　尾上　昇

ピッケル　2点　石川県河北郡内灘町　越田　利彦

山岳図書　36点　堺市大美野　久野　行雄
北安曇郡白馬村神城飯森　田中　欣一

山岳図書　30点　大町市宮田町　木村　守文

キスリング等登山装備　6点　杉並区桃井　吉田　喜義

（敬称略）

バックナンバーのお知らせ(12)

次の巻号のバックナンバーがあります。内容は主なものの紹介ですが、ご了承ください。

第34巻第3号（平成元年3月）
海ノ口一津遺跡について　島田哲男

第34巻第4号（平成元年4月）
人とスズメ　佐野昌男
付属園茶のみばなし1　太田一夫

第34巻第5号（平成元年5月）
居谷里湿原の植物群落　松田行雄

バックナンバーの請求方法

右記にご希望のものがありましたら、一部一〇〇円でおわけします。巻号と部数を明記の上、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛ご送金ください。（送料当方負担）

訂　正

第40巻第7号、③P左上段の写真エゾオオサクラソウはソラチコザクラの間違いでした。お詫びいたします。

山と博物館第40巻第8号
一九九五年八月二十五日発行
発行所　〒398長野県大町市　TEL(0)二二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三九三